



2015年6月3日放送

印象に残る症例①

能代山本医師会病院整形外科部長 相澤 治孝

今日は印象に残る症例として、四逆散という方剤を中心としたお話をしたいと思います。

私ども整形外科医は、人体の中の運動器を治療することを主な仕事としています。中には背骨、関節、筋肉、といった部分が含まれ、それぞれの専門性を持って日常の診療に当たっております。脊椎外科、肩、膝、股関節から手指の外科専門、あるいは四肢の悪性腫瘍、切断指の再接着、スポーツでの外傷、障害、失われた皮膚や軟部組織の被覆といった分野であり、さらには関節リウマチなどの関節炎も診ます。共通して骨折や脱臼などといった外傷を扱っております。このような多岐にわたる分野でどうして漢方に関係するようになったのかと申しますと、患者さんの多くは痛みを訴えてこられる場合が多いからです。

ペインクリニックといえば、最近では麻酔科の先生たちのご活躍を目にするところですが、整形外科の外来を受診される患者さんたちも、その多くは痛みを主訴とされています。これらの方たちに対して、かつての自分は鎮痛剤の処方することがほとんどでした。結果として胃潰瘍になったり、腎障害が起きたりと他科の先生方にお叱りを受けることもありました。整形外科の治療といえば、手術か保存治療。保存治療としてはリハビリテーションや理学療法をのぞくとやはり鎮痛薬の処方が増えるということになります。長年にわたり、他に方法はないものかと思っていたときに出会ったのが漢方薬でした。

最初は筋痙攣に対して、芍薬甘草湯が著効を示したことからです。自分の体でもインフルエンザの初期の寒気に、麻黄湯を服用することで、瞬く間に症状の改善が得られること

でも感じることができました。

そんな中で、ある患者さんに起きた奇跡のような薬効についてお話しします。

症例は初診時 81 歳の男性。30 年前、51 歳の時に作業中にワイヤーに巻き込まれて左下肢を受傷。重度外傷のため、大腿切断に至りました。切断直後から切断端から頭頂部に至る電撃様疼痛がみられました。また失われた足が痛いといった幻肢痛もみられました。低気圧がくると疼痛は増悪し、鎮痛剤や硬膜外ブロックは効果無く、日常生活も困難となり、腰部交感神経切除術も受けましたが、改善しませんでした。アルコール依存となり、急性膵炎、アルコール性肝障害、さらに上室性不整脈のためペースメーカー植え込み、脱毛症、不眠症、高血圧、尿路感染症、前立腺肥大、尿閉と 30 年間にわたり様々な症状が現れ、変わらない疼痛に苦しんでおられました。

81 歳になり、前胸部の圧迫感、吐き気で頻脈性不整脈を疑われ内科に入院。このときに幻肢痛、断端神経腫を疑って整形外科に紹介。

当科的には義足の不適合を考えて修理を予定しましたが、この時点で、長年にわたりロキソプロフェンナトリウムが処方されていましたが、疼痛には効果がありませんでした。この効果のない鎮痛剤を漫然と投与してしまうのは、我々もしばしば行ってしまうことではありますが、気をつけなくてはと思います。

受傷して、症状発現から 30 年を経て、四逆散を服用することになりました。服用開始から 2 週間後で疼痛軽減を自覚されました。その 2 週間後に内科から退院されたときには疼痛は改善していて、6 週間後には長年彼を悩ませていた幻肢痛、断端痛も消失していました。その後も外来で経過観察したのですが疼痛再出することなく閉服となりました。本人の喜びは大変なもので、処方した私自身もびっくりです。服用終了から 3 年が経ちましたが、現在も症状は治まっています。

四逆散の構成生薬は柴胡、芍薬、甘草、枳実、の 4 剤からなり、適応症は体力中程度。大柴胡湯と小柴胡湯の中間証で、胸脇苦満、腹直筋の攣急があり、イライラ、不眠、抑鬱感などの精神神経症状を訴える場合。主症状は腹痛、腹部膨満感、動悸。主証は四肢厥逆であるが故に、「四逆」の名を付す。気が四肢に行き渡らず、四肢の逆冷を現す“熱逆”を調う。とあります。ちょっとよく解らないですね。

傷寒論では少陰病篇に「少陰病、四逆し、その人あるいは咳し、あるいは悸し、あるいは小便不利し、あるいは腹中痛み、あるいは泄利下重の者は四逆散これを主る。」とあります。どうも精神的な要因が関連して手足に問題のある人に用いるように解釈しました。四逆散を用いて効果を上げたのは、江戸時代中期の和田東郭です。東郭は腹部に異常が見られ、それが原因で起こる腰痛や四肢の神経痛、麻痺、排尿異常やノイローゼ様症状の患者にまで四逆散を応用しています。

四逆散の精神症状に対する応用については、明治初期の名医、浅田宗伯はその適応症に「気鬱」「鬱々として閉じこもっている」「神気、爽快ならず」などをあげています。また浅田門の藤田謙造は「気持ちに張り無く、気分がうっ滞して動作が物憂く、万事を苦勞

にし、あるいは物事を憂慮してやまず。ややもすれば悲愁し、夜は夢をよく見て気分よく眠れず、あるいは物事に効悪があり、また、心中むしゃくしゃとして安定しない」と述べています。従って、四逆散が適応する精神症状は、

- 1) 些細なことが気にかかる、
- 2) 神経質で用心深い
- 3) 自分の健康に自信がもてない
- 4) 心配事や不安があると、内向的な性格のためその悩みを発散できず、「胃腸の調子が悪い」とか、「肩や首が凝る」といった腹部の臓器や筋肉系の緊張となって現れている人 といったことになるようです。

このままでは現代でいうところの心身症が四肢に発現した状態を指しているようです。

では我々の知る西洋医学では、幻肢痛、断端神経痛といった状態はどのように考えられているかという、切断端の神経が変成して腫瘍状に変化した物が断端神経腫であり、四肢のいずれかを切断した後も、まだ存在するかのような感覚が残っているものを幻肢感といい、すでに無いはずの幻肢に痛みを感じることを幻肢痛としています。この痛みは一般に焼け付くようなとか、引きつけるようなと表現される強いもので、切断した四肢を支配していた知覚神経末端の刺激によると考えられています。今日的には神経障害性疼痛となるでしょうか。しかしながら、まだ原因は明らかとはいえ、局所の問題が無くとも持続性の痛みが生じることがあり、通常とは異なる刺激でも痛みがでることがあります。これまではカウザルギー、アロディニア、CRPSと表現されてきました。残念ながら有効な治療法は無かったのですが、プレガバリンの登場で、これらの痛みを西洋医学的にアプローチできる可能性が出てきました。

しかしながら、今回の症例のような劇的に効果を示したようなことが、プレガバリンで得られるかどうかは、まだ解りません。

四逆散に関していえば、腹証として、胸脇苦満があつて、腹直筋の緊張が目立ち、漢字の「竹」のように緊張を触れる。また手のひらによく汗をかいているといった、良い投与の目安があります。少し気鬱がある方で、四肢に症状のある人には、朗報となる可能性があります。今後ともこの方剤を用いていきたいと考えております。

お聴きの皆様に、何らかの参考になれば幸いです。